山崎仁朗さんの「思い出」

山崎仁朗さんとは、教育と研究の両面で「かかわり」がある。山崎さんを偲びながら、私なりに「思い出」を語りたい。

教育面では、なんといっても「社会調査インターカレッジ発表会」（略称インカレ）が印象に残っている。主に社会学を学ぶ学生が、社会調査の成果を報告し議論しあう場が、インカレである。私は名古屋市大人文社会学部現代社会学科で「社会調査実習」を長年担当し、インカレをめざして学生にハッパをかけてきた。

山崎さんは岐阜大から多くの学生を引き連れ、いつも大きなリュックを背負い、インカレ会場にあらわれた。一見「野武士」のような風格で怖そうだが、学生に優しく指導している姿が目に浮かぶ。あれは岐阜大が会場だったインカレのときだ。当番校の責任者として、細かなことまで学生たちに指示を与えていたのが忘れられない。懇親会の場で、私が「もうインカレ」などと、いつもの寒いダジャレを飛ばしたが、彼らしく喜んでくれたようだった。

山崎さんは地域社会学の研究者であり、私とは専門は異にするが、思い出に残ることが二度ほどある。

一つは、2009 年 7 月の第 2 回東海社会学会シンポジウムである。山崎さんが担当理事として、私の研究室へ打ち合わせに。例のように大きなリュックから資料を取り出し、シンポジウム「東海社会の『地域力』を問う」企画をじつに丁寧に説明してもらった。山崎さんのコーディネーターのもと、私も「東海社会の構造変化と『地域力』」というテーマで報告した。『東海社会学会年報』第 2 号でシンポジウムが特集され、山崎さんの「特集に寄せて」とともに、私の報告要旨も掲載されている。

山崎さんは「特集に寄せて」の最後に次のように書いている。― 「全国の縮図」としての「東海社会の『地域力』を問い直す」ことは、地域的な限定を超えた普遍的な課題の追究でもあることに、改めて気づく。……本学会は、東海社会を拠点にした研究・教育・実践活動を基本にしつつも、地元の地域研究に限定することなく、より多様なテーマを、普遍的な視野で問い続けることが求められよう。

もう一つは、山崎さんと宗野隆俊さんが編集した『地域自治の最前線　新潟県上越市の挑戦』を東海社会学会年報編集委員会からの依頼で書評したことだ。400 ページを超す大著の山崎さん編著『日本コミュニティ政策の検証　自治体内分権と地域自治に向けて』とともに、共同研究の成果をじっくり読んだ。こちらは最近のことでもあり、記憶もまだ鮮明だ。すこし詳しく紹介したい。

山崎さんは編者あとがきで、本書の意図を次のように述べている。―地域自治区制度

は、合併によって失われた自治を、不十分なかたちで埋め合わせる弥縫策にすぎないとか、合併前の旧自治体のレベルに設定されて、草の根の地域コミュニティからは乖離しているなどと批判されがちだけれども、こうした批判は、制度のかたちだけをみて、それが適用されている実態を無視した表面的なものにすぎない。……住民にとって身近な自治を制度的にも保障することで、意思決定過程への参加の機会を広げたほうが、住民の主体性が発揮しやすくなり、住民がよりよく生きること、ひいては市全体の魅力を高めることにもなる。「上越市の挑戦」には、これまでの地方自治のあり方を根本から変える可能性が秘められている。

こうした批判に対する「批判の検証」が、本書を評価するうえでも重要な論点になるのではないか。本書に対する若干の「注文」を 2 点ほど述べたが、1 点だけ紹介しておく。

上越市の広域合併をどう評価するか。山崎さんは合併によって大規模化した自治体では、「自治体よりも下位の地域コミュニティ・レベルの自治(狭域の地域自治)が、なんらかのかたちで保障されなければならない」とする。その一方で、本書後に刊行された『日本コミュニティ政策の検証』で、山崎さんは序章で「平成の大合併で基礎自治体の範域がさらに拡大し、効率性を求めて行財政が縮小する傾向にあるなかで、そうしてできた「公共の空隙」にたいして、地域コミュニティ・レベルの自助や共助だけで埋め合わせできないのは明らかである」と述べている。

全国でも最多の広域合併をした上越市において、基礎自治体の「公共の空隙」がどのように、どれだけ地域コミュニティ・レベルの先進的な活動によって埋め合わされているか、今後とも注目していきたい。

2014 年 5 月、日本地方財政学会が福島大で開催された。「平成大合併の検証」というシンポジウムで、『地域自治の最前線』を執筆された福島大学の牧田実さんが報告した。報告を聞いて、珍しく会場から「書評」に書いたことなどを質問した。

山崎さんからも、わたしの拙ない「注文」などへの彼らしいコメントが聞きたかった。だが、残念ながら、もうそれは叶わない。「研究パートナー」らに聞いてみよう。それと山崎さんが精力的に進めてきた上越市の調査研究が、持続的に推進されることを願ってやまない。

それにしても、山崎さんの若すぎる「死」は残念でならない。社会学専攻のわたしの元同僚も重い病に倒れて、もういない。3 年ほど経っても、寂しさがつのる。

山崎さんのような存在感がある、若く有能な研究者を偲びつつ、ささやかな「思い出」をとじたい。

＠山崎仁朗さんの「追悼集」に寄稿　　(2017 年 12 月 1 日)